

やまぐち自然派宣言

自然共生の思想

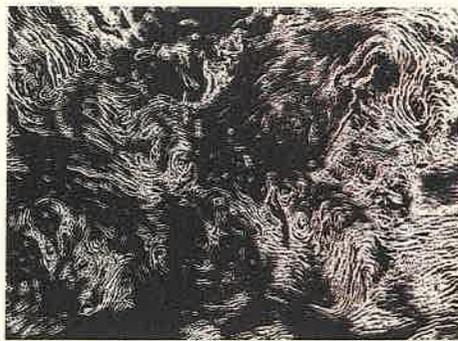
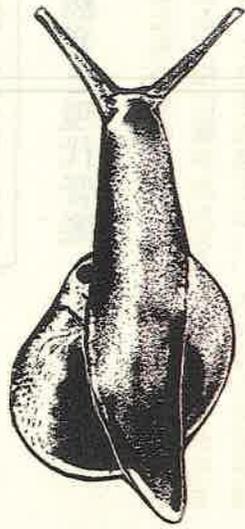
共生随筆

下関花いっぱい計画

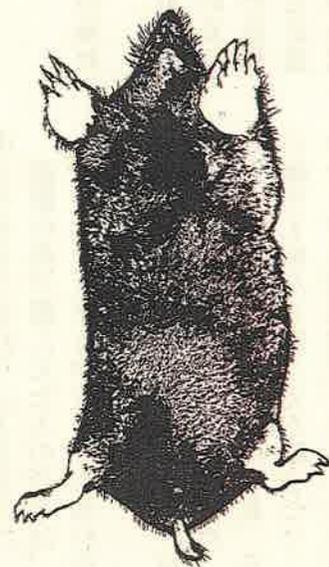
竜王山と二つの自然観察会

これからどうなる？やまぐちの海

弟見山の笹刈り



共生



山口の自然はいま

洪水八幡宮樹林

二反田溜池のカキツバタ群落

リレーミーティング in 榎野川

を振り返る

やまぐち自然共生ネットワーク

平成 20 年 12 月 10 日

自然共生の思想

自然音と現代音楽

私たちの身のまわりには美しい音がたくさんある。松に風があたると、美しい音が生まれる。これを松風と云い、人々はこの音を味わい、さまざまな作品を創り上げてきた。

早春には、梅が咲いてウグイスがきて、春を盛り上げる。夏には蝉や蛙やホトトギスが賑やかに歌う。秋には木葉散る音や鹿の声に心を躍らせた。

芭蕉は「古池や 蛙飛び込む 水の音」という俳句を作り、自然の音を取り上げている。また、「閑さや 岩にしみる 蝉の声」という俳句で蝉の音を取り上げた。よく吟味すると、芭蕉は蝉の賑やかな音をただ聞くだけでなく、心で消化して、無音の静けさに到達する。

蕪村も「春の海 終日 のたりのたり哉」という俳句を作った。この句は海の波音に没入して己を無にするという無我の境地を表現している。いわゆる「わび・さび」の境地を開いてみせたのだ。

日本人は、四季折々に、さまざまな音に深い関心を持ち、さまざまな工夫をして、楽しんで



また、琵琶や尺八、三味線、箏を使って、さまざまな音楽を作った。文字通り音を楽しんだ。だから演奏家は最終的にはいい音を出すことに生涯をかけたのだ。

また、日本の音楽では「間」を楽しみ、人が音に一体化（一如）することを目標にした。まるで、禅の世界だ。

暑い夏は洞窟が一番だ。洞窟の冷気は疲れた身体も引き締める。

洞窟の中は水の流れや天井からのしずくの音が満ちている。不思議なことに、水の音は私たちの心を静めてくれる。そしてこの音世界も、人の心で感じるうちに、絶対的な幻想的世界を開く。だから、私は洞窟では静かに目をつむり、無我の境地に遊ぶことになる。はじめの内は、単なる水の音が聞こえている

が、時間が経つにつれて、心の作用が影響するのか、時空の彼方からの音が響き、勝手に超現実的な気分になってしまふ。

それまで洞窟の奥でちよろちよろ、ころころ・・・と音をたてていた水音が急に人の話声に変わる。言葉の個々は理解できないが、間違いない話声である。

中国の古い言い伝えでは、洞窟の音は神の声で、この声の意味が分かるものは「聖人」だという。聖人でない私たちには、言葉の意味はわかるう筈がない。

秋芳洞の伝説では、洞窟の通路をたどってゆくと、他界（あの世）に到達する。この世とあの世の境には鬼女がいて、入ってくる人を見つけると、人を食べてしまうという。だから、秋芳洞（昔は滝穴といった）に入ると決して生きて帰れないと云われた。

洞窟の奥で聞こえた人の話声は、あの世の人々が話合う声だったのかも知れない。

「サウンドスケープ（音風景）」は日常の生活の中で聞こえる音を探る音楽だ。小鳥の鳴き声、蝉の声、雨の音や雷の音、そしてお寺の鐘や工場から聞こえる騒音だ。サウンドスケープを彩る音だ。こういった生活の中の音に注目して、音を深く探るのがサウンドスケープだ。

こういう音楽を研究している鳥越けいこ（学習院大学）さんは、環境の中で、昔話や伝説を語ったり、オペラにする運動が続いている。独特の自然環境の場で、そこに伝わる伝説や説話を演じ、物語を伝えた人々の心を理解し、音楽を演じるのだ。

山口放送の竹下尚子さんは、ラジオ番組で自然音のすばらしさを伝えた。山や洞窟から聞こえる音を取り上げ、その神秘の世界は聴視者を魅了した。例えば、洞窟では、地下水の流れや天井からの水滴の滴り、コウモリの鳴き声、土の上を歩く人々の足音等を録音し、ラジオドキュメンタリーとして作品にした。ここでは洞窟の自然音が独自の世界を表現していた。

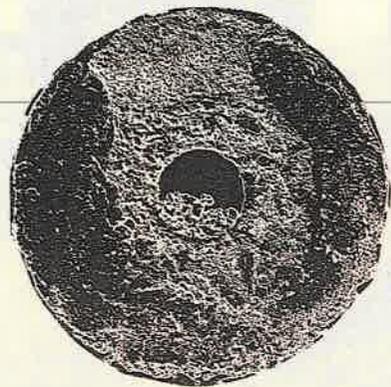


この番組の聞かせどころは、地底の交響曲だった。自然音をきれいにクリーニングし、複雑に純音を重ねながら独自の雰囲気をつくり出す。水滴の音だつて、反響の大きな部屋では数分間も響き続ける。こんな大反響の洞窟をつくり出すことだつて可能だった。

武満 徹らは音楽の世界に革命を試みた。自然に学びながら、画期的な現代音楽を作曲した。武満らが作曲した現代音楽では洋楽に、日本の尺八や琵琶、箏などの楽器の演奏をふんだんに取り入れた。尺八は音楽の「禅」といわれるように、思考に満ちた音楽だった。こうして西洋音楽に、全く異質な邦楽（日本の音楽）を取り込み、まるで「禅」のような現代音楽を創り出し、世界の人々を驚かした。武満らは、最終的には、私たちが生活の中で音を楽しむが、そこで生まれた音楽が何より大切だと考えた。また演奏でも、ガムランのように周囲の人々と譲り合い、助け合つて演奏することの大切さを強調した。そしてその音楽が、人々に感動を与え、生きる力を導き出すことを願った。

音環境の中で、四季折々に楽しんできた日本人は自然の音に反応する脳、つまり日本人特有の心が生まれていた。

日本人は自然と共生する暮らしから、すご



い自然文学や独自の芸術、特に音楽では尺八や琵琶、鼓、箏などの邦楽という独自の芸術を育て、現代ではこれを土台にして生き生きとした禅のような現代音楽を生みだしてきた。ここでも私たちが求めてきた自然と共生する環境中心主義が生きていた。

この「共生の思想」シリーズは、創刊号から、人が自然と共生する考え方の歴史を探ってきた。この文章は思いつくままに書かれた随筆だ。しかし、皆様と共に考えながら、さらに深い思考を続けてゆくための基盤となる素材がたくさん含まれている。このシリーズは今回で終了しますが、どなたか、さらに展開する随筆を書いてくださることを願っています。

（庫本 正）

共生随筆

下関花いっぱい計画

財団法人下関21世紀協会

大迫 芳彦

下関の唐戸からJR下関駅前までの、国道9号沿線の花壇に、季節の花が咲き誇っているのを見かけた方も多いと思います。少しこの活動について紹介いたします。

私たちは、景観に配慮したまちづくりを行うため、市民を巻き込んだ景観づくりを如何に進めるかが、大きなポイントとなるため、市内のまちづくり団体(14団体)に呼びかけ、平成6年「下関景観協議会」を立ち上げました。そして、行政と協力しながら「下関景観シンポジウム」や「下関都市景観賞」の選定などを実施し、さらに平成12年「身近なところで、出来ることから行動しよう」と『花と緑』をキーワードに市民参加型の新しいまちづくりのモデルケースとして「下関花いっぱい計画」を企画いたしました。

これまでの公園の花壇やプランター等の美化活動の「点」から「面」への活動に拡大していくことを目標としました。平成13年の山

口さらら博開催に伴い、県下一円で「花」でお迎えする活動にあわせ「下関花いっぱい計画」を企画し、下関の中心市街地である唐戸からJR下関駅前までの約2kmの国道9号沿線の植樹帯への花の植付けを行うことを決定し、関係機関と折衝のうえスタートしました。

まず国道沿線の花壇約140箇所を、一箇所ずつ個別に調査することから始めましたが、草ぼうぼうで草の中には多くのゴミが捨てられている状況でした。

人間、汚いところにはゴミを捨てる習性があるのか、悲しい現状でした。特に、飲食店の多い地域ではゴミの集積場のようにゴミ袋が積み重ねてある状態でした。

この地域は下関の中心市街地で、多くのオフィスビルや金融機関、商社、飲食店が軒を連ね、その各花壇の前にある店舗に1軒1軒チラシをもつて、花壇の管理のお願いに回りました。快く引き受けていただいた先、そんなものは行政の仕事と相手にしてもらえない先など様々でありましたが、どうにかスタートすることが出来ました。当面担当の無い花壇は我々景観協議会が面倒を見、花壇管理のお願い看板を立てたり、チラシの配付を行ったりし、徐々に花壇の管理者も増えてきました。その後、当初参加を断られた先も自分の前の花壇だけ人任せは恥ずかしいと参加さ

れ、また散歩中にこの活動を知り地域外からも参加したい等徐々に広がりを見せ、「下関花いっぱい計画」も約80の花壇に約400人が参加されることとなり、当初の計画通り面への広がりが出てきました。

こうして、今では自分の庭の花壇のように花を育てている人も多くなり、観光客もたくさん訪れる地域でもあることより、日本観光協会より「花の観光地づくり大賞」奨励賞、「下関都市景観賞」努力賞を受賞する榮譽も得ました。



継続の難しさ

「下関花いっぱい計画」も順調にスタートし、春と秋に花苗や腐葉土、肥料等全て参加者に現物支給していますが、財政悪化の影響で助成が徐々に減少し、花苗の確保に苦労することとなってきました。園芸センターにボランティアで手伝いに行き、育った花苗をいただいたりしていましたが解決とならず、国交省の管轄であるため相談すると、ボランティアロードの制度があるので支援できるかもしれないとの事で、早速手続きを行い、山口県第一号のボランティアロード協定締結を結び、この通りは「海峡花通り」と命名されました。この協定により暫く花苗に苦労することとはなくなり、後に国交省より「手づくり郷土賞」を受賞することとなりました。

しかし、国交省の道路特定財源の問題で本年春、いきなり予算が半分となり、またまた花苗の調達に苦労することとなりました。

また、昨今中心市街地のオフィスビルは移転等や閉鎖などにより、空き室が増え花壇の担当の無くなる場所が増えてきました。この花壇の担当を新たに見つけるのも大変なこととなっています。

ボランティアロードは、最低2ヶ月に一度は草取り・清掃活動を行うこととなっています。

すが、夏は雑草の伸び方が半端でなく、また水の確保も大変な事です。最近残念なこともありました。犬の散歩中広い範囲で花を折っていく心無い人がいて対応に苦慮しています。

しかしながら、聴覚障害のグループや通学路としている学校の生徒のグループ、ガールスカウトや企業のCSR活動の一環として取組んでいる先など、新しく多くのボランティア活動も育っており、誠に有り難いことです。

今後の展望

花苗の調達は厳しいものがあり、花の支給を受けず自分で植え付けられるところも出て来ておりますが、花苗の調達は永遠の課題かもしれません。

現在、この「海峡花通り」は、緑陰道路としてまた自転車通行環境モデル地区として整備されようとしています。

私たちは、この通りにいつも季節の花が咲きそろう、通行する人を和ませ、交通事故も無い通りにしたいと思っています。この「海峡花通り」を通られる時は、花が綺麗に咲いているか是非活動の一環を見てくださればと思います。



竜王山と二つの自然観察会

山陽小野田市 嶋田 紀和

私は山陽小野田市の南部に位置する竜王山（136m）のフィールドで主として二つの自然観察会を行っている。

竜王山の紹介は「やまぐち自然共生ニュース」No.2で行っているので省略するが、多種ある山野草の他に、夏には全国でも有数のヒメボタルが飛び交う。秋には渡り蝶で有名なアサギマダラが南下の途中に飛来し、しばらく羽を休める。その他の蝶も多種観られる。バードウォッチングも楽しめる。多様な生物の存在は豊かな自然の証しと言えよう。

一つ目の観察会は地元の公民館とタイアップして「竜王山の山野草ウォッチング」を春、秋開催している。今年で春は11回を数



春の観察会の様子

えた。定員は25名としているが定員を超えることがある。この頃ではリピーターが増えてきた。観察会のフィールドは変わらないから毎回同じことが出来ない。そのことが当方に緊張感をもたらしてくれる。

観察会で

はゆっくり歩くことで、普段生活の中で見過ごしている世界（自然科学）は新たな驚きと癒しを与えてくれる。併せて自然の大切さを胸に仕舞ってお帰りになる。今、

渡り蝶で有名なアサギマダラが好むサワヒヨドリ（サワヒヨドリ）の保全活動を仲間達と行っているが、観察会参加者の中からも協力の申し出がある。更には前向きな提言をいただいている。ありがたく感謝している次第である。



観察会での集合写真

春の観察会は竜王山が一番輝いている時で時間が足りないくらいである。それに比べ秋は少し寂しくなる。従ってアサギマダラの呼び込みを図ろうと活動を行っている。アサギマダラは春に沖縄方面から日本列島を北上して秋に南下する。昨年秋、竜王山で群れていた。

観察会の時、それに遭遇して観察会が大いに盛り上がった。吸蜜するサワヒヨドリ等の保全をしっかりと行えば、アサギマダラの訪問が更に増えるのではないかと期待している。

二つ目の観察会は地元の小学生との観察会である。私にとってはこれが一番楽しい観察会である。キラキラ輝く沢山の瞳と自然を介してコミュニケーションすることは嬉しいことである。以前は二つの地元の小学校から声がかかっていたこともあったが、今は一校のみである。



サワヒヨドリで吸蜜するアサギマダラ

98年度の小学校学習指導要領が改訂され「総合学習」が取り入れられた。地域のことや地域の自然等を学ぶようになった結果、私に声がかかったのだ。しかし昨今、学力低下が叫ばれるようになって、今年度学習指導要領が改訂され学力重視に再度シフトされた。これによって、本当によいだろうか？

ちなみに、フィンランドはOECD生徒の学習到達調査ではトップである。授業時間は日本より少なく総合的な学習は日本より多いとある。塾や偏差値が存在しないという。私を呼んで下さる校長先生は「今の子供達には自然体験が大切なのですよ」と言われる。全く同感である。

以下は8月27日朝日新聞の「子どもの声聞こえてる？第2部輝くとき」の記事である。中学生の自己評価は諸外国に比べ極めて低いとある。この背景は小学生のころ自然体験や

一番楽しい小学生との観察風景



日常生活での体験			
	何度もある	少しある	ほとんどない
■ 大きな木に登ったこと			
05年度	19%	27	54
98年	24%	33	43
■ 海や川で貝を取ったり魚を釣ったりしたこと			
05年度	27%	33	40
98年	42%	37	22
■ キャンプしたこと			
05年度	20%	28	53
98年	27%	34	38

(05年度：国立青少年教育振興機構の調査から。98年：青少年教育活動研究会の調査から)

共同生活体験が少ないとの指摘がある。信州大の平野吉直教授は「子どもは自然や共同生活を通じて達成感を得る。それが生きる実感や喜びにつながる」といつている。

私は子ども達とフィールドワークする時はなるべく教えないようにしている。五感を使って自分で考え体験して貰うようにしている。

「今日は竜王山に登って小さな冒険をしましよう！」と出して出かける。今日の子ども達の自然体験の希薄さを強く感じる。少し危険と思われることは回避させられている。本来通らなければいけない路のバイパスを通されているのではなからうか。そこから知恵も感性も創造力や他の生き物を思いやる心も生まれ難い。「ヒトと他の生きものとの共生が大切なんだよ」と説いても理解が得られるだろうか？



なんだろう？

フィールドワークから学校に戻って「今日、竜王山での冒険は小さな冒険だったと思う人は手を挙げて」と問うとしない。「では中ぐらいか大きな冒険だったと思う人？」全員が手を挙げる。「皆さんも一人一人みんな違うよね。違うことがとても大切なんだよ」と締めくくる。子ども達の元気な声に送られて学校を後にするのである。

これからどうなる？山口の海

萩博物館 研究員 堀 成夫

■今、「この海で何が起っている!？」

近年、山口県で「エイが増えた!」「巨大クラゲが現われた!」「変わった熱帯魚が釣れた!」などの珍事をよく見聞きしませんか? 実は1990年ごろから、南の海(おもに熱帯地方)にすんでいるはずの生物がしばしば目撃されるようになっていきます。



県内ダイバーによって発見された
熱帯魚のクマノミ
(長さ5cm) : 萩市相島

1980年代の後半あたりから山口県近海の水温が高くなってきたためと考えられます



地元ダイバーによって発見された熱帯性の巨大ヒトデ・オオフトゲヒトデ
(幅約70cm) : 萩市見島

が、それが世間で叫ばれている「地球温暖化」の現われなのかどうかはまだわかっていません。地球上の海の水温は数十年の周期で上がったたり下がったりを繰り返していますし、ある場所で水温が高くなる原因はほかにもいろいろあるので、研究者たちは今、情報をできるだけたくさん集めて論議しているところです。

■萩博物館が今やっていること

いずれにしても山口県の海的环境が少しずつ変わってきているようですが、それによって生物たちの世界はどのように変わり、私たちの生活にどんな影響がでてくるのでしょうか? 萩博物館では、海岸に打ち上げられる貝殻を採集し、もともといた温帯出身の種類に新しくやってきた熱帯出身の種類とがどれぐ

らい混じっているかを調べています。これを何年も続ければ、水温の変化によって海の生物たちの世界がどのように移り変わっている



海岸の貝殻たちが、海的环境変化を物語る。

かを知ることができるでしょう。また、ダイビングで海中の景観や生きている生物たちの様子を直接見たり、さらには山口県水産研究センター(長門市)・海響館(下関市)と共同で漁業者やダイバーなどからの珍生物の目撃情報なども収集し、数年ごとに海水温などのデータと合わせて分析・論議しています。こうして出てきた結果は、郷土の自然のために私たちが「何をすべきか」「何ができるのか」を考え実行するための材料になるはずですよ。



地元漁業者によって捕獲された深海生物・ダイオウイカ
(長さ約3m)：長門市川尻

■ みなさまへのおねがい
郷土の海の環境変化は、できるだけ多くの
人々の目で見えていった方がより詳しく知るこ
とができます。やまぐち自然共生ネットワーク
の会員のみなさまも、山口県の海(とくに
日本海側)で何かの生物を見かけて「おや
っ!?!」と感じられましたらご連絡ください。



長年の間に地元の方々によって発見された珍しい深海魚
の数々：剥製として萩博物館で常設展示中

採集して標本をお送りいただくのがいちば
んよいですが、写真や目撃情報だけでも大歓
迎です。なお、必ず目撃した場所・年月日・
発見者・当時の状況といったデータを添えて
ください。ご協力くださった方は、論文や展
示会などで協力者として芳名を記させてい
た
だ
き
ま
す。

■ 来夏の萩博物館をお楽しみに!

萩博物館では、毎年夏休みに郷土の生物を
テーマとした楽しい企画展を開催していま
す。来年(平成21年)のテーマは海の生物。
山口県の日本の知られざる魅力と、海が暖
かくなってきたため少しずつ変貌してきたそ
の姿を、巨大エイ「マンタ」と共に旅をしな
がら解き明かしていただくテーマパーク風の
展示。題して・・・

「マンタの海流大冒険〜まぼろしの海神王国
をめざして」

平成21年7月4日(土)〜8月31日(日)

(予定)

県内外の多くの方々からお寄せいただいた
標本や情報を満載! 郷土の海の今を知り未
来を考える絶好のチャンスとなる、山口県人
必見の展示会です。ご家族・ご親戚・ご友人
と、めいっばいお楽しみください。

(会期中無休、観覧料：大人五百円、高校・
大学生三百円、小・中学生百円)

〒七五八-〇〇五七

萩市堀内三五五 萩博物館

TEL 〇八三八-二五-一六四四七

FAX 〇八三八-二五-三二四二

E-mail: 1542@city.hagi.lg.jp

弟見山の笹刈り

自然観察友の会代表世話人 赤間 正

カタクリは山口県では寂地山(1337m)及びそれに連なる山々に自生している。毎年ゴールデンウィークは沢山の登山者で賑わっている。弟見山(1085m)の山頂にも、数は少ないが自生している。植栽地としては、山口市や萩市に有ると聞いているが、自生地としては、共に1000m以上の山頂近辺のみである。

カタクリはユリ科の多年草で淡紅紫色の花は可憐で、見る人(登山者)の心を和ませている。4月中旬に芽生え、4月下旬から5月上旬に花を咲かせ、6月下旬には地上から姿を消す地上での期間の短い植物です。このような植物を早春季植物とかスプリング・エフェメラル(春の蜻蛉)と呼んでいる。地上での期間が短い為、花が咲くまでには10年近い年月がかかると考えられる。

私とカタクリの出合いは、平成10年4月に3回目の弟見山登山で偶然の事だった。その時、山頂付近は笹が今ほどは無く、沢山のカタクリが咲いており、その花の美しさに感動し写真を何枚も何枚も撮った事を今でも思い出す。その後もカタクリに逢いに弟見山に登

ってきたが、笹の繁殖力は凄まじく、笹の中では光が届かないので、カタクリが花を咲かせるのが減ってきた。今まで何回か弟見山山頂の笹刈りをしてきたが、一人で畳6畳ぐらいの笹を刈ってもちががあかず、また翌年には笹が倍程に繁殖し、思案していた。そんな時、平成19年に蒨ヶ岳の常連サン達が蒨ヶ岳―弟見山の縦走路の笹刈りをされた様で、蒨ヶ岳方面の登山道は綺麗になっていたのだが、刈った笹がそのまま放置されていた。笹の大きな葉は朽ちるのが遅く、翌



弟見山の登山道脇の笹の根本に咲くカタクリの花

年カタクリが芽を出すのを邪魔する結果になっていた。これではダメだ!と弟見山の笹刈りを仲間呼びかけたところ、3名が名乗り出てくれたので、12月4日に4名で笹刈りに出かけた。

仏峠に9時に集合をかけたのだが、少し前に行くに既に皆さん集合されていた。狗留孫山の奥の院で出逢った山伏こと中国観音霊場先立会の松島さんが、「赤間さん、笹を吹いていい?」と仰ったので、「良いですよ!」と生半可な返事をしながら身支度をしていたら、法螺貝を「ブオー!ブオー!」と吹き出された。9時10分過ぎに登山開始。仏峠からのコースはいきなり急登から始まる尾根登りである。大小(5m×20m)の急登が981mピークまでに8ヶ所もあるのでかなりきつい。寒波の後で今回は暖かいのだが、ブナやミズナラの落葉が登山道に積もり、前日の雨で落葉が濡れているので、急登では滑り安く、足元に注意が必要だった。今回は観察会ではないので、私はマイペースで登ったので981mピーク(周南市の最北端と書かれた札が立っている)に10時5分過ぎに着いたのだが、皆さんから「早すぎる!」と云われた。「981mピーク」は名前が付いてないからその様に云われ続けて来たが、このピークこそが「兄見山」だと言う説が最近発表された。蒨ヶ岳を別

名「兄見山」と云うと言われてきたが、私はこのピークを「兄見山」とする説に賛成する。“981mピーク”では余りにも可哀想である。この話を休憩がてら説明（長い休憩）し、弟見山山頂を目指し出発した。下りでブナの木にヤドリギが黄色の実を沢山付けており、日の光に照らされて綺麗であった。弟見山の尾根の急登な直登を登り、山頂に11時前に到着した。無事に山頂に着いたので、松島さんが法螺貝で四方の山に向って「ブオー！ブオー！」と吹かれた。作業は昨年笹刈りをされた所に生えてきた笹を刈ろうという事にした。各人それぞれ得物（鋸・鎌・剪定鋏等）を取り出し、用意すると筋ヶ岳方面に散って行った。昨年笹刈りをした形跡が分らない程に登山道を覆う様に笹が生えている。11時半過ぎに、お腹が空いたので少し早いけれど昼食にした。女性1人と男性3人、昼食の会話もはずみ、楽しい一時だった。昼食後も笹刈り！刈った笹は集めて笹の藪の中に捨て、登山道に刈った笹が出来るだけ無い状態にした。笹を刈ると緑色の葉のイワカガミが沢山出てきた。来年はカタクリの他にイワカガミも咲いてくれると良いねなどの話をした。素人の笹刈り、結構疲れるものである。14時前に作業を終了した。4人で200mぐらいの登山道の笹刈りをした事に皆満足していた。来

年もっとたくさん参加者がある作業はもっともつとはかどるのにと云いながら、来年以降もこの作業を続けようと思つた。下山するに当たり、お世話に成つた山々に「ブオー！ブオー！」と法螺貝を鳴らされた。15時過ぎ下山開始。下りは急登の逆で急坂の連続である。落葉に滑って尻餅を付いてしまつた。16時10分過ぎに無事下山完了。松島さんが最後に山々に無事に下山できた感謝を込めて「ブオー！ブオー！」と法螺貝を鳴らされた。



笹刈りした登山道



笹刈りしていない登山道

基本的に、弟見山山頂（1000m以上）には、笹の中に沢山のカタクリが自生していると思われるが、笹が繁殖して日光を遮り光合成が出来ない可哀想な状態に置かれていると思う。だから、山頂近辺（1000m以上）の笹を全て刈り払えば良いのであろうが、個人が勝手にその様な事をするには問題があるので、短絡的に行動するのは良くないと思う。まず、弟見山は島根県との県境の山であるので、尾根の登山道が県境と思われる。島根県側はわからないが山口県側の山の斜面は企業の所有地のはずである。所有者の許可や同意無しに行動を起こすと、犯罪につながる可能性がある事を理解しておかないといけないと思う。

今回我々4名は、既にある登山道のそばの笹を刈り、そこにあるカタクリの保護を目的に行動を起こしたものです。来年（平成21年）以降も弟見山の登山道の笹刈りは継続していくつもりです。賛同者の増える事を願っています。

今回、私の提案に賛同し、協力してくださった自然観察指導員の金子さん、松浦さんと自然観察友の会の松島さんに感謝いたします。

山口の自然は今

渋木八幡宮樹林

(山口県自然記念物)

長門市渋木に渋木八幡宮があり、その社叢は、原生林の様相を残した植生として注目されていた。もともと、鎮守の森は昔から地域の人々によって、大事に保護されてきたからである。

この社叢には、シイやタブノキ、ウラジロカシの巨木があり、この地域の植生をよく示していた。森に入ると、落ち葉がたまってふかふかし、台風で折れた枝が自然に朽ちていた。しかも、クモなど森の動物も豊富だった。



山口県はこの社叢を昭和六十年三月二十九日に自然記念物に指定し、保全策をとった。



調査によると、この森の構成樹種は次のようになっている。

高木層には、コジイ、イスノキ、ウラジロガシ、タブノキ。
亜高木層にはサカキ、シギミ、クロキ、コ

ジイ、アラカシ。

低木層にはヒサカキ、サカキ、ハイノキ、アセビ。

この森は自然状態で、良く保存されており、説明板もよくできていた。



二反田溜池のカキツバタ群落

(山口県自然記念物)

美祿市美東町二反田のため池にカキツバタの大規模な群落がある。毎年五月、六月の花の時期には美しい花(白から青紫色)が咲き、たくさん自然愛好家が訪れて、野生のカキツバタを楽しまれる。

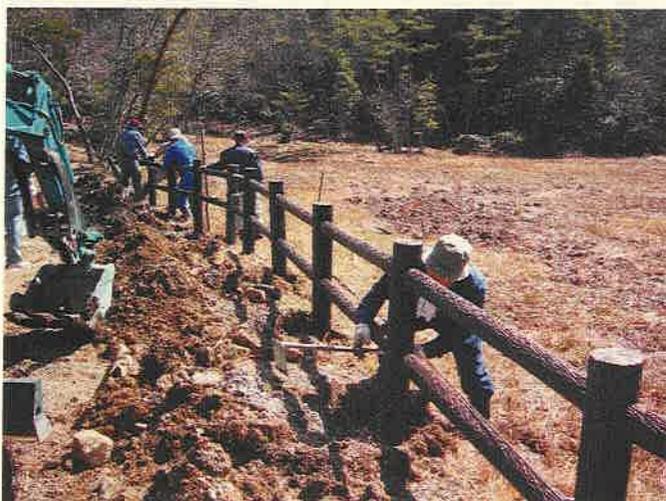


山口県は昭和五十一年三月二十六日にこのカキツバタ群落を山口県の自然記念物に指定し、保護してきた。

花が終わった八月下旬に、私はこの池を訪ねてみた。コウホネやオオミズゴケ、サワヒヨドリなどの湿地の植物が楽しめた。丁度、地元の「カキツバタを守る会」の人々が草刈や柵の補修に来ていた。話を聞くと、イノシシが湿地に入り込んで土を掘り返したり、

植物愛好家が湿地に入り、植物を掘り取ると嘆いていた。その対策として電気柵を設置したり、平成二十年三月には、県民協働型自然共生手づくり事業の採択を受けて、老朽化した木柵を擬木柵に交換する工事を行っている。

カキツバタの群落を自然状態で維持するためには、適切な管理が必要らしい。ここでは地元のボランティアの人々が絶えず見回りをしたり、周囲の環境維持に努力されていた。地域の宝はみんなで守りたいものだ。



やまくち自然派宣言
 一歩自然に近づきたいやまくちの自然派

第5回 リレーミーティング in 榎野川



「やまくち自然派ネットワーク」では、山口県の美しい自然環境を後世に継承していくために、「山・川」を軸に学び、体験、再生をリレーして「リレーミーティング」を開催しています。
 参加者は、榎野川を中心とした遊歩道「やまくちの自然派」をめぐります。榎野川は、山口県農業を活性化に資する延長30kmの幹流河川で、その最大内径にあっての細川を流す樹林に、榎野川遊歩道に遊歩道が架けられ、遊歩道沿線の風景が堪能されます。大内山系が雄姿を現し、遊歩道は自然派ネットワークの中心地として、遊歩道沿線の歴史と文化を堪能し、環境保全や自然再生などの取り組みについて、語り合いたいやまくち自然派ネットワークのみなさんと一緒に参加して下さいますようお願いしております。

開催日：平成20年9月27日(土)～28日(日)
 開催地：山口県(金峰)山口県セミナーパーク(山口県スズカスル)山口県森林ふれあいセンター)
 主催：やまくち自然派ネットワーク ※個別行事のみの参加も可能です。
 共催：山口県、山口市
 協力：榎野川流域地域経済活性化協議会 山口中央森林組合 榎野川流域自然派ネットワーク
 山口県環境協議会 山口県観光協会 山口県観光コンベンション協会

リレーミーティング in 榎野川を振り返る

榎野川流域地域通貨・連携促進検討協議会
 去る9月27日28日の二日間にわたり、第五回目となるリレーミーティングを山口市の榎野川流域を会場に開催しました。
 様々な方々の御協力を得て、無事に終了することができました。この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

今回のリレーミーティングでは、榎野川の源流から河口域までの様々な取組の一部を紹介するとともに、環境学習推進センターが募集した「県民協働型自然共生手づくり事業」の採択を受けて、河口域での干潟耕耘や源流に整備した四季の森での樹銘板の設置など、活動の一部を実際に体験していただきました。
 この紙面をお借りして、二日間のミーティングを振り返ってみます。

【9月27日(土)】

① 榎野川ミーティング

山口県セミナーパークにて9時30分からの受付には、東は尾道市、西は下関市から37名の参加者が集合。
 10時からの開会式の後、榎野川流域地域通貨連携促進検討協議会のメンバーが榎野川流域での取組みについて、これまでの経緯をパワーポイントで紹介。
 二日間のスケジュールの説明のあと、参加者の自己紹介、全員でセミナーパーク内の食堂で昼食をとった。

② 干潟再生事業にチャレンジ

12時にセミナーパークの駐車場からマイクロバス2台に乗り込んで、約20分走ったのち、離れた榎野川の河



口にあたる山口湾の干潟に到着。
 長グツに履き替え、用意されたスコップやクワを各自が手にいざ干潟へ。
 あらかじめ指定された区画に、目印となるラインが引かれており、参加者はそのラインに沿ってスコップで干潟を掘り進んで「耕うん作業」を行った。
 干潟での耕うん作業は初めての体験という人も多く、最初はスコップやクワの扱いになじめず、なかなかまっすぐに掘り進めなかった人も、時間が経つにつれて次第にコツをつかみ、ゴカイや小魚を見つけて歓声をあげたり、別のグループが捕獲したカブトガニを観察したり、皆楽しそうに作業を行っていた。



途中からは、ある程度成長したアサリを取って、別の場所へ移動させる作業（間引き）に精を出した。こうして干潟での1時間半はあつという間に経過。記念撮影を行ったのち、14時30分には干潟を出発した。

③源流の碑見学

干潟での作業を終え、長グツを脱いだ一同は2台のバスに乗り込んで今度は榎野川を上流に向かつて移動。榎野川流域地域通貨連携促進検討協議会のメンバーが今年8月に完成させた「源流の碑」第2号である大内人形「フシノのお殿様」が設置されているJR山口駅前に向かった。

大内人形「お殿様」

本体周りに描かれた山口の四季折々の風景の説明を受けた参加者は、後ろにまわったり、写真を撮ったり熱心に見入っていた。その一行の様子に気づいた駅周辺の観光客も興味深そうに眺めていた。



15時30分、今度は荒谷ダム上流に設置された「源流の碑」第1号大内人形「フシノのお姫様」のところへ移動。久しぶりの「お姫様」

は、完成後1年半経過したこともあり、周囲の景色にすっかりとけ込み、頭の上にはうっすらコケが生えていた。ここでも大内人形をバックに全員で記念撮影。

④意見交換会

荒谷ダム出発から30分後、17時に山口市宮野にある「やまぐちふれあい館」に到着した参加者は、温泉で今日1日の汗を流し、すぐそばの宿泊先の「山口ユースホステル」に徒歩で移動。

18時より交流会。まず榎野川流域地域通貨連携促進検討協議会の田村会長から歓迎のことば。祝杯のあと、参加者同士が互いに席を移動しながら、話題も二転三転。自然、環境、



自分たちの活動、もろもろについて、夜が更けるのも忘れて大いに語り合った。

【9月28日(日)】

⑤榎野川流域の取組を体験

朝7時、ユースのオーナー自慢のフレンチ風オムレツの朝ごはんを堪能したのち、榎野川の源流に整備された「四季の森」にバスで移動。ここでは、

県民協働型自然共生手づくり事業の採択を受けて設置された案内看板を見ながら、榎野川を守る活動のきっかけ（産廃処分場建設計画）やその後の募金活動、植樹作業について説明を受けた後、参加者が手分けをして植樹された木に樹銘板を設置した。

作業のあと、道の駅「仁保の郷」に移動し、榎野川流域地域通貨連携促進検討協議会が発行している地域通貨



「フシノ」を使って地元の特産品などの買
い物を楽しんだ。

⑥記念講演 「川と文化」

講師 中原中也記念館 福田百合子館長

9時40分山口森林ふれあいセンターにて
受付。27日からの参加者とともに、10時よ
り、山口市出身で、榎
野川とも縁の深い福
田百合子先生の講演
「川と文化」を聴く。

参加者からの質問に
は丁寧に応じ、いつも
笑顔をお見せなさい福田
先生のお人柄のオーラ
で、会場は終始和やか
な雰囲気だった。

講演のあとは地元の
バンブーオーケストラ
(バンブーレゾナン
ス)による演奏会。参
加者がよく知っている
童謡やポピュラーが演
奏され、各楽器の特徴
や音色の紹介などもあ
り、癒し系満載の楽し
い内容に会場の人たちも満足そうだった。



⑦榎野川流域の海の幸、山の幸を堪能

12時からは会場の山口森林ふれあいセン
ターの敷地内での野外昼食会。午前中、演奏
を披露したバンブーオーケストラのメンバ
ーや講師の福田百合子先
生も加わって大いに盛
り上がった。

メニューはアユの炭
焼き、シジミの味噌汁、
4種類のポン酢飯(竹
の筒を飯ごう代わりに
した炊き込みご飯)、ナ
ルトビエイとブラック
バスのから揚げ、(ナル
トビエイはアサリの天
敵、ブラックバスは有名
な外来種。どちらもおい
しかった。)ミョウガの
天ぷら、栗ご飯のおむす
びなど。お皿、箸、汁椀、
ご飯茶碗は、この日のた
めにすべて竹で作った
お手製のもの。

自然のままの食材、食器に参加者一同からは
感嘆の声が上がり、たっぷり用意した味噌汁は
ほとんどなくなりました。希望者には残ったご飯類
をおむすびにして、お持ち帰りいただきました。



13時より閉会式。今

回の引受団体であった
榎野川流域地域通貨連
携促進検討協議会の岡
事務局長がお礼のあい
さつと、来年度は周防
大島町で開催される旨
を紹介。続いて次回の
引受団体である周防大
島体感クラブの田中理
事長が引受のあいさつ
をしてすべての行事を
終了。

最後に参加者、スタ
ッフ全員で手をつない
で輪になり、「ガンバ
ロー！」のかけ声とと
もに、榎野川での2日
間の日程は無事に幕を
閉じた。

来年は周防大島町で
自然と人との共生につ
いて大いに語り合いま
しょう。



お知らせ

祝第9回やまぐち県民活動

アップ・パワー賞受賞

山口県では、特に優れた県民活動を行う県民又は県民活動団体を表彰する、やまぐち県民活動パワーアップ賞を実施していますが、今年度の表彰団体に、やまぐち自然共生ネットワーク会員の「NPO法人子ども劇場山口県センター」と「錦川流域ネットワーク交流会」の2団体が選ばれ、10月21日（火）二井知事から表彰状が授与されました。

ネットワーク会員からは、昨年度の「NPO法人周防大島自然体感クラブ」に続いての受賞となります。おめでとうございます。

今年度受賞された2団体の活動の概要を簡単に紹介します。なお、詳細はネットワークのホームページに掲載していますのでご覧ください。

NPO法人 子ども劇場山口県センター

次代を担う青少年の健全育成を図るため、臨床心理士や小児科医と連携して、子ども専用の魅力電話相談「チャイルドライン」を開設。子どもの企画による交流活動や映画の鑑賞

活動等により、地域や家庭における子育てを支援するとともに、県内各地の子育て支援団体の指導・助言など、中核的支援団体として他の団体の模範となる活動をしている。



錦川流域ネットワーク交流会

錦川の清流を守り、育てるため、地域住民を巻き込みながら、上・中・下流が一体となつて環境保全や文化の再生等幅広く活動。

支流ごとに「源流の碑」を建立し、流域連携を進めるとともに、宇佐川産のアユが「日本一うまいアユ」に選ばれ、錦川ブランドの確立につながるなど地域力の向上にも寄与している。



編集後記

共生第七号をお届けします。

山口のすぐれた自然を後世に残すために県内各地で活動されておられる方々がネットワークを組み、五年が経とうとしています。この七号では、各地の自然の現況のレポートや各地でたくましく自然を守りながら、自然観察会や環境学習を進めている方々の手記、市を花で飾る運動の活動記録など多彩な記事が掲載できました。また、本年のリレーミーティングの記録もあり、大変充実した内容になりました。

ご執筆いただいた方々にお礼申し上げます。これからも様々な取組や意見を掲載してネットワークの輪を拡げていきたいと思えます。皆様の投稿をお待ちしています。編集係

